

## ロマン・キム国際会議報告記

坂中紀夫（同志社大学嘱託講師）

### 1. ロマン・キムとは誰か？

1937年5月21日、ソ連邦・内務人民委員部はロマン・ニコラエヴィッチ・キムの逮捕をスターリンに報告した。取調べの過程で判明したのは、ウラジオストクの日本総領事であり、参謀本部の現地諜報の指導役である渡邊〔理恵〕が、1922年に彼を徴募し、その指示下でスパイとして合同国家政治保安部・内務人民委員部〔ソ連の保安機関〕に潜入させていたということだった。

キムの本当の名前はモトノ・キンゴである。キムは、日本の外交官であり、第一次大戦時にロシア大使を務めた後、山本内閣で外務大臣となる本野一郎の婚外子だった。本野一郎は1928年に亡くなる〔実際には外相就任は寺内内閣。没年も1918年〕。<sup>1</sup>

この引用は、第二次大戦までのソ連の対日諜報・防諜を描いたO・モゾーヒン氏の研究書からのもので、「日本のスパイ」として逮捕されたロマン・キム（1899-1967）の供述に基づいている。恐らく、2013年初頭に出版されたこの本が一つのきっかけとなり、この朝鮮系ロシア人作家・東アジア研究者の存在が、ある種の「事件」として注目されるようになった。事実、これ以降、彼を扱った書籍や論文が立て続けに発表され、<sup>2</sup> 今年の春にはA・クラノーフ氏の『ロマン・キム』がモロダヤ・グヴァルジヤ社の伝統ある「偉人伝シリーズ」から刊行されたほどだ。<sup>3</sup>

この評伝の刊行に関連して、2016年5月26日、ロマン・キムに関する国際会議がモスクワのロシア科学アカデミー極東研究所にて開かれ、ロシア・アメリカ・韓国・日本の研究者が報告を行った。<sup>4</sup>

＊

まず、キムの経歴を確認しておこう。彼は朝鮮系ロシア人であると同時に、スパイ容疑をかけられるほどの日本通でもあった。これはウラジオストクに移住していた抗日運動家

<sup>1</sup> *Мозохин, О.Б.* Противоборство. Спецслужбы СССР и Японии (1918 - 1945). М., 2012. С. 333, 334.

<sup>2</sup> *Куланов А.Е.* В тени восходящего солнца. М., 2014.; *Он же*, Шпионский Токио. М., 2014.; *Просветов И.В.* «Крестный отец» Штирлица. М., 2015.; 拙論「ロマン・キムと固有名の問題：日本に関連する諸作品」、『*Slavistika*』第30号、2015年、pp. 165-183.

<sup>3</sup> *Куланов А.Е.* Роман Ким. М., 2016.

<sup>4</sup> Международная конференция, посвященная известному исследователю проблем Восточной Азии, писателю Роману Николаевичу Киму.

の父が、「敵を知る」という目的で少年キムを日本に送り込んだためである。ただし、本人の話では、このとき彼の世話をしたのは、奇妙なことに国粋主義者の杉浦重剛だったらしい。

その後、ロシアに戻ったキムは、20代半ばから東アジア研究者として論文や翻訳の発表を始め、芥川龍之介や黒島伝治を最初期にロシアに紹介する。その日本研究の高い評価から、ボリス・ピリニャークが自著『日本の太陽の根本』（1927）に、キムの大部の解説「蛇足」を載せたほどだった。1934年には単著『向こう三軒両隣』を発表するも、学者としてのキャリアは、スターリン時代の逮捕を機に途絶える。第二次大戦後に釈放された彼は、今度は作家へと転身し、ソ連推理小説のジャンルに名を残すことになる。



## 2. 会議について

キムはロシア・朝鮮・日本に深くコミットした人物であったが、20世紀を生きる中でこの三重性がさらに分裂する（ロシア／ソ連、朝鮮半島の分断、大日本帝国／日本）。ナショナリティの問題だけををとっても、彼においては大変な錯綜を見せるのである。それだけに、伝記的な事実にも不明な点が多い。なぜ国粋主義者が抗日運動家の息子を預かっていたのか、本当に日本のスパイだったのか、本野一郎が実父だった可能性はあるのかなど、ここまで書いてきたことでさえはっきりしないのだ。今回の会議でも、こうした様々な謎を反映するかのよう、国際関係史や民族問題、諜報・防諜史、文学・推理小説といった多角的な観点からキムが論じられた。

上：極東研究所、下：入口の「日の出」ロゴ

\*

会議には、三十名近い参加があり、十件ほどの報告が寄せられた（ペーパーのみの参加等も含む）。各報告は、大まかに歴史・政治関係／文学関係に分けられ、その終了後、会場内の参加者による共同討議に移った。個々の報告の詳細については、すでに極東研究所코리아研究センターのキム・エンウン氏によるレポートが発表されているので、<sup>5</sup>ここでは当初のプログラムに予定されていたもののみ簡単に触れておく。



会議の様子

A・ジェビン極東研究所코리아研究センター長の開会の辞、親族がキムの父の戦友だったというV・ツォイ氏の謝辞に続いて、キム・エンウン氏が最初の報告を行った。この報告では、ロシア極東地域への朝鮮移民、その発展による抗日運動の形成について論じられ、キムとナショナリティの問題における歴史的・政治的背景が確認された。次に、『ロマン・キム』を上梓した歴史家・作家のクラノフ氏が、ナショナリズムの問題を取り上げ、キムの朝鮮民族への帰属意識と日本に対する否定的な感情に、ある時期から揺らぎが認められることを指摘した。黒宮広昭インディアナ大学教授の報告では、極東共和国時代(1920-1922)と第二次大戦時における米ソの協力をテーマに、「祖国ソ連」に対するキムのコミットメントが考究された。朝鮮・日本・ソ連への並列的な帰属意識がここから窺える。

ユリアン・セミョーノフ記念館のA・レーピン氏は、ソ連スパイ小説のジャンルを代表する作家セミョーノフの創作に対するキムの影響関係を論じた。ロシア科学アカデミー東洋文献研究所のF・クバーソフ氏の報告では、キムと忍術との関係が議論となった。キムは世界的に見ても早い段階で忍術を外国に紹介した人物であり、ロシア語で最初に忍者について語られたのは彼の「蛇足」においてだったという。キムはまた、中編小説「幽霊たちの学校」でも忍術を取り上げ、このテーマをエンターテイメントに応用している。韓国の中央大学の金弘中氏は、「蛇足」におけるナラティブの問題を扱った。ここでのキムの叙述には、民族的な心情、知識人・社会主義者の立場から日本の植民地主義を批判すると共に、日本文化を理解し、それを客観的に解説する学者としての語りが併存する。

---

<sup>5</sup> [http://www.ifes-ras.ru/images/js/js\\_2016\\_2\\_82-92.pdf](http://www.ifes-ras.ru/images/js/js_2016_2_82-92.pdf) 以下の記述もこれを参考にして  
いるが、あり得る誤りは当然のことながら筆者の責任である。

### 3. キムの文学

忍者やスパイのような同一性・帰属性の不確かさというテーマを、各発表から読み取ることができるように思われるのだが、では小説家としてキムはどうだったのか？ 冒頭に引用した内容が衝撃的だったのも、彼が作家として知られていたからである。今回の会議で筆者が問題にしたのはこの点だった。



上：参加者の一部

左：筆者

キムは実際の出来事（シベリア出兵や第二次大戦）を作品の舞台として設定し、そこで生じる事件や謎を主題とすることが多い。そのため、彼の作品はしばしば政治探偵小説と呼ばれる。

探偵小説においては、意外性のためか、真相が階層化することがある。最初のホームズ物である『緋色の研究（習作）』からして、イギリスでのある犯罪（前半）が、アメリカにおける宗教問題（後半）へと遡られる。

キムの作品の構造に注目すると、ここにも同様の二重性が指摘できる。ある表面的な事件が、より深層の原因に由来するのだ。ただし、一つ決定的に異なるのは、例えば暗号や殺人事件といった表層の謎が、どれだけ論理的に考えても読者・探偵には解けないということだ。これは推理作家としての力量の問題ではなく、むしろ意図的な設定である。というのも、表層の謎はそもそも存在しないのだ。実は、暗号はただの文字列で、殺人事件も起きておらず、より深層の原因が作り出した妄想だったことが、物語の終わりで告げられるのである。しかし、ここにはもう一つ特筆すべき点がある。単なる文字列を暗号だと、横たわる身体を凶行の証拠だと思い込んで捜査していた探偵役は、最終的な真相に至り、なぜか安堵するのである。自分の努力が実は無用であって、物事の核心は全く別のところにあったことを知るのが、なぜ後悔ではなく放心につながるのだろうか？

このことの意味について手短かに触れておく。図式的に捉えれば、ここで作者は、登場人物が真相（現実）を知った後も、彼らの不毛さ（妄想）に肯定的な価値を与えようとしている。つまり、本当のことをカッコに入れて、誤った判断を楽しんでもよいのだと。この限りにおいて、キムは「他でもありえた」ことの可能性（偽の暗号・偽の遺体への没頭）

を書き続けたのである。先ほど、忍者やスパイにも似た捉え難さがキムに付随しているとの印象を述べたが、彼の作品における謎の一義的な解決の排除（「それではなかったかもしれない」）は、その文学的な表現だったのだと見なすことはできないだろうか。

\*

ところで、キムの小説は「謎とその論理的解明」というミステリのジャンルの規範に違背しているので、読者によっては不満を覚えるだろう。筆者が彼の作品の構造に注目したのも、それが欧米の古典的な探偵小説のイメージから奇妙なずれを見せていたからである。報告後は、この構造に特化する方法について問われたのだが、それにはこのジャンルについての理解の違いが関係していたのかもしれない。というのも、キムが作家として活躍した



た 1950-60 年代のソ連では、国家権力の鼻をあかすようなホームズの私立探偵はブルジョア的と批判され、犯罪を巡るジャンル小説の多くは民警小説（警察小説）という形を取ったからである。そのため、作品を「犯人・被害者・探偵」の関係構造に還元し、形式的に把握する試みが異質に映ったとも考えられる。ソ連探偵小説という文脈で、筆者の取った方法が妥当だったかどうかも含めて、今回の会議は新たな課題を突き付けられる場所となった。

\*



末筆となりますが、この報告は日本ロシア文学会国際交流助成を受けています。また一部の写真をアレクサンドル・クラノフ氏よりご提供いただきました。記して感謝いたします。

上：ワガニコフスコエ墓地

下：キムの墓。会議の前日、他の参加者と共に訪れた。